

# 『マクベス』における超自然的 要素について

武 並 義 和

は じ め に

『マクベス』に関する古典的著述である *Shakespeare's Philosophical Patterns* の中で、カーリー (W. C. Curry) は「『マクベス』を理解するためには、その劇に影響を与えていると見られる範囲内で、スコラ哲学の全背景を再構成し、総合しなければならない」と述べている。確かに、スコラ哲学の知識を持ち合わさない私たちが『マクベス』に接した時、奇異に思ったり、何となくそぐわない感じを持つことが少なくない。私たちはそれらを漠然と時代の違いからくる、大した意味を持たぬ非本質的な事柄と見なして、ほおかぶりを決め込んでいる。カーリーは、そういった点について私たちの蒙を啓いてくれる。出版されてからもう半世紀になろうとしているけれども、以下、この書を主として紹介しながら、<sup>1)</sup>『マクベス』に見られる超自然的要素を考察することにする。

(1)

カーリーの説くところによると、私たちがまず心に銘記すべきことは、シェイクスピアの時代においては、悪（悪魔とその勢力）は主観的な実在であると同時に、非主観的な実在であると考えられたことである。つまり、「悪は

---

1) カーリーからの引用はすべて、*Shakespeare's Philosophical Patterns* (1937; rpt. Gloucester, Mass. Peter Smith, 1968) の第3章と第4章 (pp. 53-137) からである。

人々の心の中に主観的に現われるが、また、人間精神の働きに何ら依存しない形而上の世界に客観的に存在した」のである。世の賢者たちは、少数派のサドカイ教徒 (Sadducees) を除いて、すべて悪の世界の存在を信じた。悪の世界には悪魔たち——「evil spirits (邪悪な霊), devils, demons, Satan」——が住んでいて、「自然の作用に彼らの力を投入し、人間精神に影響を与えることができた」。具体的に言えば、彼らは天体とは無関係に嵐を起こし、雨を降らせ、また、空気を圧縮することにより思うがままの姿・形を装うことができた。さらにまた、人間の気 (spirits: animal spirits, natural spirits, vital spirits の3種) と体液 (humours: blood, phlegm, choler, melancholy の4種) を乱すことによって、想像力にいかなる幻覚でも起こさせることができた。

邪悪な超自然的存在、すなわち悪魔は、絶えず人間の周囲に潜んでいて、人間の心に悪が宿るや否や、それをさまざまな身体の表示から察知し、その人間を悪事へ、究極的には破滅へと誘惑し、誘導する。

科学的な視点に立脚すると自負する現代において、以上のような見方を非科学的なものとして一笑に付するのはたやすい。しかし、それでは『マクベス』の理解は甚だしく狭められることになる。(たとえば、ある批評家たちによれば、魔女たちはマクベス自身の無意識的または半無意識的罪悪を象徴的に表現したものでしかなく、かくて彼女たちの客観的存在が否定される。) シェイクスピアの創造した「Weird Sisters は、善に対立する暗黒の世界の代表者であり、実際は悪魔」であって、ただ老婆の姿を装っているにすぎない<sup>2)</sup>。

Weird Sisters は、「人間の内奥の思考を読むことはできない——それは神のみに可能なことである——が、顔の表情や身体の表示からどんな激情が人間を駆り立てているか、どんな暗い欲望が彼女たちの育成を待っているかを、ほぼ正確に推測する」。また「彼女たちは、人間の間で外的に起こる事

2) シェイクスピアが舞台上に直接悪魔を登場させなかったのは、当時悪魔の扱いが喜劇的になっていたからであるという。

柄はすぐに分かるという意味で千里眼の持主である」。荒野の雷鳴と稲妻の中で戦闘を見ながら、日没前に勝負がつき、マクベスが勝つということ、彼がコーダーの領主に叙せられるということ、また、将来王になるということを知っている。さらに、「劇の他のすべての出来事——バンクォウの殺害、フリーアンスの逃亡、マクダフ夫人と子供たちの殺戮、マクベスの種み重ねられた罪と悲劇的な死」なども、時の経過とともに知りえたに違いない。

## (2)

マクベスはいつダンカン殺害を思いついたか。ハンター (G. K. Hunter, *New Penguin Shakespeare* の編者) は、その問題は「この劇に含まれる悪の観点からすれば、重要な問題とは思われ<sup>3)</sup>ない」と一蹴する。ドーヴァ・ウィルソンは、これに対して「殺害の考えが生まれたのは、マクベスがコーダーの領主に叙せられたことをロスとアンガスから知らされ、かくて、悪魔が真実を話すことができることを理解した時<sup>4)</sup>である」と言う。一蹴説もウィルソンの見方とともに、1幕3場の関連場面に対する適切な反応でないばかりか、エリザベス朝の悪魔学 (demonology) の説くところに逆らうものである。悪魔学とはほとんど無関係でありながら、ブラッドレー (A. C. Bradley) の見方は妥当である (もっとも、ややあいまいのきらいはある) ——「マクベスはそれ [魔女の予言] を聞いた時、既に邪心を抱く人になっていた。彼の心が、正確にどの程度まで罪を犯していたかは問題であろう。しかし、邪心のない人ならば、彼のように、王冠の予言を聞いただけで、恐怖におそわれることはないであろう。又、その直後に、弑逆の考を頭に浮べることもないであろう。この考は、彼に新しく思い附かれたものではなかった。乃至、少くも彼は、かねてから、もっと漠然と或る不正な空想を抱いていたのである。それで、彼がこの予言を聞いた瞬間、その何れかが即座に甦って来て、

3) *Macbeth*, ed. G. K. Hunter, p. 13.

4) *Macbeth*, ed. J. Dover Wilson (1947 ; rpt. Cambridge Univ. Press, 1973). p. Iv.

内奥の恐ろしい邪心を彼に示すのである<sup>5)</sup>」。

ファーナム (W. Farnham) はより明確である——「そんなに美しく響く言葉<sup>6)</sup>を聞いて、なぜ驚き、恐れるように見えるのかというバンクォウの質問から、マクベスがすでに殺害を考えたことがあること、またそれ故に、後に妻に見せることになる魂を揺さぶる恐怖をすでに知っていたということが、かえって知られるのである。予言の言葉は、全く邪心のない人間にはそんなに速く思い浮かぶはずのないイメージを、数行あとの彼の言によれば、心臓を肋骨におち当たらせるような恐ろしいイメージを、すぐさまマクベスの眼前に提示した。かくて魔女たちは、殺害の暗示を、それを受け取る用意のすでにできている人間に差し出したことになる。その男は、自らの思考によって魔女たちを招き寄せたと<sup>7)</sup>言っよう」。

カリーの説明は、さらに具体的である——「悲劇が始まる前に、マクベスの過度の欲望は、スコットランドの王冠を目差していた。そして、それを手中に収めるすばやい手段としてダンカン殺しを考えていた。しかしながら、時も場所も優利に運ばないままに、何事も起こらなかった。だが、勝ち誇った戦から、自己の偉大さの承認を求めて止まない自己愛<sup>8)</sup>にふくれ上がって帰って来た時、悪の悪魔的勢力——Weird Sisters によって象徴される——が、彼の望んで止むことのなかった移ろいやすい利益 (mutable good) を手に入れる絶好の見通しを、彼の過度の想像力に対して示唆する……彼が王国を欲しがっていることを知って、彼は将来王になると予言する。彼女たちはこのように彼の意志を悪へと強要することはできないが、彼の激情を掻き立て、

5) ブラッドレー著、中西信太郎訳『シェイクスピアの悲劇 下巻』(岩波文庫、1959)、pp. 138-39.

6) 'All hail, Macbeth! that shalt be king hereafter.' (「万歳、マクベス！将来王たるべき人」) を指す。

7) Willard Farnham, *Shakespeare's Tragic Frontier* (University of California Press, 1963), p. 106.

8) カリーの引用するトマス・アクィナスの説明によれば、「罪の直接原因は、＜移ろいやすい利益＞への執着である。すべて罪の行為は、何か現世的な利益に対する過度の欲望から生ずる。そして、現世的な利益を過度に願うことは、＜自分自身を過度に愛する＞という事実のためである。かくて、自己愛は罪の根本的原因である」。

想像力の激しい、過度の不安を引き起こす。そのため理性の判断は歪められ、彼の意志は望んでいた現世の利益 (temporal good) を得る手段を選ぶに至る。実際、彼の想像力と激情は、外部からのこの邪悪な衝撃のもとに強烈なものとなる余り、＜存在しないものを除いては何物も存在しない＞（‘nothing is but what is not’<sup>9)</sup>）。また理性は、＜この誘惑は悪いはずがない、良いはずがない＞（‘These solicitings cannot be evil, cannot be good’）と判断するほどにまで妨害されている」。

確かに、マクベスは予言を聞く以前に、すでにダンカンの殺害を考えていたと言わねばならない。そして、魔女たちがマクベスに無気味な目を光らし、機会を窺うようになってから、かなりの時日が経過していると考えてよいかもしれない。カーリーによれば、「勝ち誇った戦から、自己の偉大さの承認を求めて止まない自己愛にふくれ上がって帰って来た時」が、まさにその機会である。私はさらに、シェイクスピアが意図的に配慮したこととして次の点にも注目したい。「血煙の立つ剣を振りかざし」、敵陣のまっただ中に割って入り、敵将を「<sup>へ</sup>臍から顎にかけて真二つに斬り裂き」、累々と重なった「屍の異様な形相」（‘Strange images of death’）に恐れもなさず、まるで「血煙の上がる傷口で血浴みする」（‘bathe in reeking wounds’）ことを楽しむかのごときマクベス——ここには、マクベスの勇猛果敢をただ伝えるに足るは尋常ではない表現が用いられている。シェイクスピアは、荒れすさんだ異常な心的状態にあるマクベスを私たちに印象づけようとしている。殺戮に酔いしれたマクベスにとって、今一つの殺害を考えること、いや、思い出すことは、きわめて自然なことであろう。魔女たちは、このようなマクベスの心的状態に目を付けたと見られよう。

### (3)

カーリーによれば、「シェイクスピアは、客観的悪の形而上の世界についてのキリスト教的な考えを『マクベス』に浸透させている。劇全体が悪魔勢力

9) 外界のものは何も見えなくなり、幻影だけが見える、という意。

の敵意を持った存在で一杯である。その勢力は自然を動かし、悪魔的説得の手段によって、幻覚、地獄の幻影、憑依<sup>びようい</sup>によって人間の魂をわなにかける」。

「魔女の出現は、『マクベス』における悪魔的表示の比較的小部分でしかない」。その他の例を次に見ることにする。

(a)マクベスの城に荒れ狂い、第2幕を取り巻く嵐は、普通の風ではなく「自然の四大要素に対する悪魔の力の顕示である。自然の諸力の幾分かは休止しているように思われる。世界の半分で自然は死んだように見える。ただならぬ有毒の雰囲気<sup>10</sup>が垂れこめ、城と付近の地域に浸透する。不自然な暗黒——久しきにわたって悪の勢力の環境——が星を覆い隠し、朝方さし昇る太陽を圧殺する(Ⅱ. iv. 7)。レノックスの宿所——明らかに遠く離れていない——では、夜は荒れ狂い、煙突が吹き倒され、泣き声と断末魔の異様な叫び声が空中に聞かれる。あまねく浸透した悪魔の活力に影響を受け、不動の大地も熱を帯び、震える(Ⅱ. iii. 59-60)」。

(b)マクベスの城はまさしく地獄と化したのであるから、酔っぱらった門番が城を地獄の入口と感じ、自分をその門番と錯覚するのは、ブラッドレーの言うように、「恐ろしいまでに真実に近い<sup>10)</sup>」。

(c)＜老人＞は70年の人生で、昨夜ほど恐ろしい出来事を経験したことはないと言う。鷹がふくろうに食い殺され、ダンカンの馬が狂乱して食い合うという不自然な事件が起こる(Ⅱ. iv)。

(d)悪魔たちは、「眠っている人間の頭に不浄な幻影をつめ込む……バンクォウは彼の意識的な心が眠り、意志が静止すると、3人の魔女たちを夢に見ずにはおれない」。この恐ろしい幻影のために、鉛のように重い眠気がのしかかってくるにもかかわらず、彼は再度眠りたくないと言う。そして、そのような夢を見るのは悪魔のせいであることを知っているので、彼は悪魔を拘束し、威圧する力を持つ能天使たち(Powers)に訴える——

Merciful Powers.

10) ブラッドレー, p. 209.

Restrain in me the cursed thoughts that nature  
Gives way to in repose! (II. i. 7-9)

慈悲深い能天使たちよ、  
眠ると人に襲いかかる呪わしい思いがわが内に  
起こらぬよう守らせ給え!

(e)「マクベスが王を刺し殺した直後、霊界は邪悪な行為に揺さぶられ、隣室で眠っていた2人の男は、悪夢に苦しめられる。ひとりが眠りながら笑い出すと、他のひとりが<人殺し>と叫び、お互いに目を覚ます。悪魔の勢力がなお付近に横溢しているのを意識して、ひとりが<神よわれわれを守らせ給え>と叫び、他は<アーメン>と言う(II. ii. 23-8)。」

(f)空中に浮遊し、マクベスをダンカン殺しへと誘導する短剣は、illusion(幻影)かhallucination(幻覚)かである。前者であるとすれば悪魔の働きによる。悪魔は空中にどのような姿・形でも作り出すことができるからである。幻覚であるとすれば——この方がより妥当な見方であろう——マクベスの熱に圧迫された脳の体液の乱れから生じた心の虚像である。そして、「マクベスが殺害後聞いたように思う、<もう眠れないぞ!マクベスは眠りを殺した>という、家中に向かって歓喜したかのように叫ぶ不可思議な声についても、同様の説明が可能であろう(II. ii. 35-43)」。

(g)バンクォウの亡霊については、シェイクスピア時代の亡霊論を知る必要がある。「その時代の現実主義者たちは、バンクォウの亡霊は幻覚、つまり、恐怖による体液の乱れから作り出された、マクベスの想像の産物でしかないと言うであろう。不可知的な事柄に敏感な他の人たちは、しかしながら、そのように作り出された幻覚は、短剣と声の場合と同様、つまるところ、悪魔勢力の働きに帰せられるべきものと主張するであろう。プロテスタントもカトリック教徒も、そのような状況下では人間が亡霊を見たと思像するのは可能であると意見が一致しよう」。しかし、カトリック教徒は、それは「殺害者に復讐するために煉獄から帰って来たバンクォウの本当の霊であるか、も

しくは、悪魔ないしその使いたちによって空気から作り出された、バンクォウの姿をした幻影である」と見る。「これに対してプロテスタントは、それはバンクォウの霊などではありえない、幻覚でないとすれば、それは実際、バンクォウの姿に似せかけた、人を惑わす姿をした悪魔であるか、それとも、バンクォウの死体を動かす（生命を与えないまでも）同じ邪悪な霊であるに違いないと主張するであろう」。

問題は安易な解答を許してくれない。無難なところは、「バンクォウの亡霊は悪魔勢力が空気から作り出し、宴会でマクベスの眼前に提示した地獄の幻影であって、殺害者を混乱させ、完全に狼狽させるのが目的であった」ということであろう。

(h) 8人の王の幻影とそれらとともに再度出現するバンクォウの亡霊も、悪魔の策謀であることに疑いの余地はない。マクベスを裏切り、最後の破滅へと導くための幻影である。

(i) 最後にマクベス夫人。「彼女が助力を求めて呼びかける人殺しの霊どもは、目に見えない実体だと言われている。すなわち、邪悪な考えやぞっとするような想像ではなくて、客観的な実体を持った形態、目に見えない邪悪な天使たちであって、自然のすべての不自然な出来事は彼らの働きによるとされる」。マクベス夫人は、「彼らがこの世の穢らわしい雰囲気と下界の暗黒に出没することを知っている。それ故、彼女は夜が地獄の真黒な煙——その濃厚さのために天でさえ暗闇の毛布を刺し通し、彼女の企んだ行為を目撃できない——に包まれることを歓迎するのである。彼女の祈りは明らかに聞き入れられる。夜の到来とともに、すでに見たように、彼女の城は望んだ通りの暗黒に覆い隠される。これらの霊的実体は、精神活動が人体に及ぼす効果を手抜きなく探り、邪悪な考えの証拠をじっと待ち受ける。そして、証拠を掴むと、人間の意志という障壁を乗り越えて侵入し、人体に取り付くことができる——このこともマクベス夫人は承知している……かくてマクベス夫人は、邪悪な天使たちの攻撃から彼女の心の働きを守るのではなく、彼らが巧みに彼女の身体に入り、それをコントロールすることによって、善と憐れ

みに対する精神の自然な傾向が絶ち切られることを意図的に望む。彼女は言う――

Come, you spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,  
And fill me from the crown to the toe top-full  
Of direst cruelty! make thick my blood;  
Stop up the access and passage to remorse,  
That no compunctious visitings of nature  
Shake my fell purpose, nor keep peace between  
The effect and it! Come to my woman's breasts,  
And take my milk for gall, you murdering ministers,  
Wherever in your sightless substances  
You wait on nature's mischief! ( I . v. 41-51)

来たれ、お前たち霊ども、  
人殺しのたくらみに力を貸す者どもよ、私をこの場で  
女でなくしておくれ、頭のでっぺんから足の爪先まで  
恐ろしい残忍さでいっぱいにしておくれ！この血を濃くし、  
憐れみの通いくる血管をすべてふさいでおくれ、  
自然の情に見舞われ、良心の呵責に  
私の恐ろしい決意が揺さぶられ、決意と実行が  
離れ離れにならぬように！来たれ、私の女の乳房に、  
そして私の乳を胆汁に変えておくれ、人殺しの霊どもよ、  
見えざる実体のお前たちが自然界の悪事に  
いずこでたずさわっていようとも！

そして疑いもなく、悪の霊たちは、まさに彼女の願望通りに実際彼女の身体に取り付くのである」。かくて彼女は、女らしさを失い、頭のでっぺんから足の爪先まで恐ろしい残忍さで満たされ、憐れみの情は消える。「彼女は、

おおよそ思考と行動において鬼のような女王になる」。

(4)

マクベスはなぜ弑逆<sup>いい</sup>という大罪を犯すことを考えたのか。王冠が欲しかったのだ、と言えはそれまでの話であるが、もう少し事情を検討するために、シェイクスピアが利用したホリンシェッドの *Scottish Chronicle* を見てみよう。

『スコットランド年代記』では、ダンカンは柔弱な性格で、統治力に乏しい王であった。国内には反抗する者が少なからず、遂にその中から謀叛者マクドウォルド (Makdowald) が出た。彼は王を「臆病な腰抜け」 ('faint-hearted milkesop'<sup>11)</sup>) と呼び、武人よりは僧侶を治める方が適しているとまで言っている。従って、彼の謀叛とノールウェイ王やデンマーク人の侵入は、ダンカン王の政治力の弱さにつけこんだものと見てさしつかえない。そして、これらの国家存亡の危機に、獅子奮迅の活躍をして国を救ったのが第一にマクベスであり、次にバンクォウである。

平和が戻った時、ダンカン<sup>12)</sup>は長子マルカムを後継者に決定する。ダンカンの従弟に当たるマクベスは、この決定を不当だと考える（後継者が年若く、自分の行動に責任を取れない時は、一番の近親者が王位に即くことになっていた。史実によれば、マクベスには王位継承権があった。『年代記』ではその点があいまいであるけれども、王のめぐるした策略——具体的な説明がなく、どの程度事実であるのか不明——によって即位の望みを絶たれ、マクベスは王に対して敵意を抱くことになる）。マクベスは、他方では魔女たちの予言に意を強くしながら、「信頼できる友人たち——バンクォウはその中の第一人者であった——に決意した意図を伝え、彼らの約束した援助を信頼して王を殺害する」。その後、10年間善政を施すが、次第に本性を現わして暴君となり、予言の的中することを恐れてバンクォウを暗殺し、最後にはマク

11) *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare Volume VII*, ed. Geoffrey Bullough (1973; rpt. Routledge and Kegan Paul, 1978), p. 489.

12) Bullough, p. 496.

ダフの剣に倒れる。

要するに、『年代記』のダンカンが王としての力量を持ち合わさなかった、マクベスの王に対する敵意にはそれ相応の理由があった、弑逆は他の有力者たちの支持を得た、などマクベスに有利な事情が存在した。ところが、シェイクスピアは以上の事情のほとんどすべてを彼の劇から取り除いた。特に、殺害の動機については王位への野心ということしか示されていない。従って、シェイクスピアのマクベスは、それだけ悪心の深い人間となっている。それでは、劇作家はマクベスを野心に取り付かれた忘恩の王殺害者として、言葉を換えれば、殺人の素地のあった単なる悪人として描いているのであろうか。ミュア (Kenneth Muir) が注意を促しているように、私たちは「有徳者の中にある悪への傾向と邪悪者の中にある徳への傾向を過小評価」し、「世界を潜在的な殺人者とそうでない者とに二分することは許され<sup>13)</sup>ない」。マクベスを潜在的な殺人者として片付けることは、もちろん、私たちが彼から受ける全般的な印象と相容れない。

マクベスの心中に弑逆の気持が潜入する心理的プロセスを、劇の中に示されている事柄に基づいて推測してみよう。1幕4場ダンカンはマクベスを次のように激賞する――

O worthiest cousin!

The sin of my ingratitude even now

Was heavy on me: thou art so far before

That swiftest wing of recompense is slow

To overtake thee...

only I have left to say,

More is thy due than more than all can pay. (14-21)

おお、あっぱれな従弟よ！

13) *The Arden Shakespeare Macbeth*, ed. Kenneth Muir (1972; Methuen, 1974), p. xlix.

恩知らずの罪がたった今私の上に  
 重くのしかかっていた。君ははるか前方にいる、  
 恩賞が翼をけんめいに羽ばたかせても  
 君には追いつけぬ.....

私に言えることはただ一つ、  
 君の受け取るべき恩賞は、私に払える以上の、それ以上のもの。

My plenteous joys,  
 Wanton in fulness, seek to hide themselves  
 In drops of sorrow. (33-35)

私の喜びはあふれんばかり、  
 いかんとも抑えがたく、悲しみのしずくに  
 身を隠さんとする。

王はマクベスに対する感謝の余り、「忘恩の罪」を犯していると言い、最後は涙にくれている。前の場（3場）でも、王はマクベスの目ざましい活躍ぶりの報に接して、驚嘆と賞賛の感情に圧倒され、胸中を表わす言葉に窮するほどであったと述べられている。

ダンカンが高齢のためか病弱のためか、もはや戦に臨むことができない。賞賛と感謝の言葉は、そのまま王としての非力とマクベスへの依存度の大きさを物語るものであり、その仰々しさからは卑屈と迎合の精神が窺える。国王としての非力と責任を問題にすることもなく、並べ立てられる感傷的な言葉を聞いて、マクベスは忠誠心を鼓舞されるところか、心中に侮蔑の念が去来したであろう。そして、このような感情に見舞われるのは、それが初めてのことではなからう。

当時スコットランドでは、長子相続制はいまだ十分に確立されていなかったと見られる。なるほどシェイクスピアの描いたダンカンは、温厚潔白な人柄ではあったが、王としての力量は不十分であった。そんな王を見るにつけ、マクベスはダンカンの退位とそれに代わる自分の即位のことを考えずにはお

れなかった。そしてそのことは、次のマクベスの言葉からも分かるように、可能性のないことではなかった。

If chance will have me king, why, chance may crown me,  
Without my stir. (I. iii. 143-4)

わしに王になる運命があるのなら、自分から動かなくとも、  
そうだ、運命がわしを王にしてくれよう。

マクベスには即位の可能性があった。若輩の長子マルカムか、それとも、猛将の従弟マクベスか、そのいずれを後継者にするかは、ダンカンの決定に委ねられていたと見られる。マクベスは力量においても血縁関係においても王冠を戴いて不思議のない人物であった（そのことは、ダンカンの死後、彼の息子たちが逃亡した時、異議を唱える者もなくマクベスが即位していることから明らかである）。しかし、即位の可能性は、王になりたいという気持ちに、さらには、ダンカンを亡き者にしてまでも王になりたいという恐ろしい野望につながっていった。（参考までに言うと、史実によれば戦乱時代のスコットランドでは、943年から1040年の間に9人の王のうち2名を除いて殺害された。そして、一族のうち最強者が王位に即位<sup>14)</sup>した。）この野望は、恐らくマクベス夫人の強力な影響を受けながら、彼の心中に浮かんでは消え、消えては浮かんだ。

魔女たちはこの悪心につけこんだのである。マクベスに悪心を抱かせたのは、決して魔女たちの言葉ではない。彼女たちは将来王になると予言しただけであって、犯すべき邪悪な行為については一言も触れていない。予言は、瞬時にしてマクベスに殺害のことを思い出させるが、脳裏に描かれる「行為の恐るべき醜悪さ<sup>15)</sup>」にたじろぎ、一度は思い留まる。しかしながら、ダンカンは「忘恩の罪」を犯していると言った舌の根の乾かぬ内に、その罪を忘れたかのようにマルカムを皇太子に決定する（ダンカンが、マクベスをコード

14) Cf. Wilson, p. viii.

15) ブラッドレー, p. 152.

一の領主に叙した後も、なお「忘恩の罪」と言っていることに注目すべきであろう)。その宣言を聞いた時、マクベスの不満は最高潮に達する。期待を踏みにじられ、望みを絶たれたマクベスは開き直る。そして、耳の中にまだ消えずに響いている予言の言葉に力を得ながら、＜忘恩者＞を亡き者にしようと思決意する。言うまでもなく、この決意は1幕7場で再度ぐらつく。

長子を優先することによって、言葉とは裏腹に、自分を過小評価したと言わざるをえないダンカンの態度に、マクベスの自負心が傷ついたこと、＜ダンカンには柔弱、マクベスこそ王たるべき人＞と叫び続けたと想像されるマクベス夫人の激越な口調、神秘的な魔女たちの予言——マクベスを弑逆という大罪にあえて立ち向かわせたのは、以上の三要因であったと言えよう。